

幕を閉じない悲劇を見た

安倍等思

福島を訪れる機会がありました。雪化粧で真っ白な国道六号線を走っているとあの福島第一原発の煙突が並んで遠くに見えます。車内に持ち込んだ線量計はそこに近づくと高値を示しました。科学的に長時間曝露は避けるべき値であると言えるものです。避難で幕を開けた悲劇は帰還困難の苦難の最中でした。頭の中で理解していたものと目の前の現実との落差に恐ろしさを感じました。

その一帯では信号は黄色の点滅のみですので、まるで自動車専用道路です。国道から別れる道、スーパーマーケットやアーケードの入り口、ガソリンスタンドはバリケードで封鎖されています。そこにはあの日に止められた車がそのまま放置されています。そして一般家屋の入り口にまでバリケードが設置され、だれも入ることが許されません。人さえいればどこにでもある街並みなのに、そこには命がありません。

所々に警備員やパトカーが配置され、監視体制が引かれています。海岸から山までの広大な範囲での人々の営みが一瞬にして凍り付いています。戦争という言葉が思い浮かびます。その中に掲げられている言葉は終わりのなき悲劇の台詞としてはあまりにも悲しい。

筑後川から高良山までの全ての入り口が封鎖され、誰一人いない久留米市の中を国道三号線にだけ車が走っている姿を想像して下さい。あなたは自分の家、職場に近寄ることすらできないのです。放射線による身体の被害は出ていないという事実はあるものの、この恐ろしいシーンは目の前の現実でした。

私にできることは限られていることは十分に承知しておりますが、悲劇が現在進行形であることを伝えたいと思いました。

